

◇郷土愛を育む

外国で生活した人なら、現地で日本のことを質問され、困った経験が少なからずあるでしょう。痛切に感じることは、日本人でありながら日本のことを知らな過ぎた、ということだそうです。いくら語学に堪能でも、日本のことを知らない日本人には、外国人も失望し、魅力も感じないでしょう。まして、自国への愛や誇りのない人間など、尊敬もされないでしょう。親交を深めることなどできないと思います。

足利で育った人間が、足利のことを知らず愛着もないなら、外国人だけでなく日本人にも好感をもたれないでしょう。論語の素読が足利学校で行われるようになった今では、「足利学校に祀られている人は誰か」の問いに、孔子と正しく答えられるでしょうが、素読が行われていなかった頃、正しく答えられた小学6年生が3割、中学3年生が2割との調査もありました。過半数が足利尊氏と答え、中には、聖徳太子やキリストといった答もあったとのこと。国際化の時代、国際感覚を磨く必要性が叫ばれる昨今なればこそ、足元をしっかりと見つめたいものです。論語を通じて、足利学校を郷土の誇りに思うような人間が育まれていくことを期待しています。

足利在住の二人の信濃育ちの方(国際プロバリスト足利会員)と懇談の機会がありました。信濃の歌(信濃唄)を絶賛し、今でも歌えると懐かしげに話していました。上三川出身の二人の職員(前職)は、今でも上三川音頭をある程度できると話しました。郷土連帯、郷土愛を育むという観点から、足利市歌についても今後は教えていきたいと考えています。やがて足利を離れて暮らす卒業生も少なからず出ることでしょう。郷土を誇りに思い郷愁を覚えるようであってほしいものです。

◇文化破壊では

「戦後レジーム(体制)を見直す、そういうスキーム(枠組み)をつくる、マニフェスト(政権公約)、3月にパブリックコメント(一般からの意見募集)が行われる、サプライズ(驚き)発言、総理のパッション(情熱)の具体化、家庭教育支援フォーラム(公開討論会)、改革のモメンタム(勢い)が低下、レームダック(権力衰退)はいかんとも、…」といった外国語は、適当な日本語があるにもかかわらず、国民に向けて発せられています。なぜ日本語を使わないのか不思議です。

外国語を排斥するつもりはありませんが、政財界や報道関係者など、多くの国民を対象に仕事をする方は、外国語の使用に留意する必要があると思います。公務員ならかなりの制約があって当然です。国民が理解できるようにしなければならぬからです。

伊吹文明(京都府側連盟会長)元文部科学大臣は、小学校の英語必修化に反対し、国語をしっかりと学ばせるべきとの所信(就任時)を述べました。日本人は日本語で考えを組み立てます。単なる言葉(伝達手段)ではないので、英語必修化の是非はともかく、国語の重要性という点での異論はなかったように思います。「国語の力をつけないと英語の力もつかない」と、何人もの英語の教師が話していますが、小学校で英語が必修(5・6年生)になるのですから、国語教育は益々重要でしょう。

中国人には、中華思想による世界に冠たる漢民族としての誇りがあるのか、欧米劣等感がないとのこと。日本人はどうなのでしょう。台湾人から何通か手紙をもらいましたが、しっかりと漢文(旧文の時もあった)で書かれていました。日本語は日本の文化そのものなので、もっと大切にすべきでしょう。

◇三猿の意味は

東照宮の神厩舎に8枚の神猿彫刻があります。1枚目は、子猿の傍らの親猿が遠くを眺めています。2枚目は三猿です。そして、その後成長していく6枚の猿の彫刻があります。2枚目の三猿は有名で、「見まい 聞かまい 話すまい」と理解されていますが、真の意味は、「見させまい 聞かせまい 話させまい」なのだそうです。1枚目の親猿が眺めているのは、子猿の未来(成長)であり、2枚目の三猿は、健全な成長のために必要な心得が、そして、その後の成長の過程を眺めれば、そう考えるのが自然であるとのこと。

子どもの成長にとって好ましくないものを「見させまい 聞かせまい 話させまい」ということの示唆ならば、不健全なビデオや雑誌が販売され、粗野で暴力的な言動などが、テレビやラジオなどで流されている現況は、三猿の教えに反していると言えましょう。

◇余裕がないと

教師の仕事は忙しく、目の前の仕事で精一杯の状況があります。他のことに目を向けていたのでは、いつまでも仕事が終わりません。脇目もふらずにの心境にさせられてしまうようです。これが欠点であると考えています。教師は視野が狭い、との批評を耳にすることがありますが、こんなところに大きな要因があると感じています。

私は、生徒指導主事になり、授業時数が一挙に10時間以上減りました。担任もなくなりました。すると、今までできなかったこともできるようになり、目を向けなかったことにも目が向くようになるなど、心に余裕が生まれました。全教職員がこうでなくてはならないとしみじみ感じたのです。ある生徒が、教師に相談にきました。その教師は相当に忙しかったらしく、相談に応じませんでした。生徒は、自分が先生の眼中にないのではないかと感じてしまったようで、不満を漏らしていました。

県内の中学校では、45人学級が40人学級となり、今では35人学級にまでなりましたが、根本的な解決は、学級の人数を減らすことより、標準法(教職員定数の標準に関する法律、学級の数で職員数を決定)の改正ではないかと考えています。

◇子どもの前では

「子供の前で学校や教師を批判してはいけない」と頭では分かっているけど、つい口が滑ってしまう人もいることでしょう。教師だって、わが子のことになれば、同じような行動をとってしまうこともあるのではないかと思います。2度3度どころか、しばしばやるようでは思慮分別に欠けると言わざるを得ません。まさか教師が、生徒の前で生徒の家庭批判をすることはないでしょうが、この場合は最悪の結果を招きます。

学校や教師批判については時々問題提起されますが、家庭内については、あまり話題にされることがありません。私は、こちらの方がより問題なのではないかと感じています。母親が子どもの前で父親を、父親が母親を批判している実態は、学校や教師批判よりも多いのではないかと思います。祖父母が父母を、父母が祖父母といった場合も、時にはあるかもしれませんが、圧倒的に多いのが、母親による父親批判ではないかと思います。批判されて当然の父親であっても、子どもの前で批判することは賢明ではありません。

批判されている教師や父親が、どんなに正しく、子どものためを思って言ったことでも、子どもは聞き入れなくなります。即ち、すべての指導は無になってしまうのです。子どもにとっても不幸なことで、学校はこういう点についても語っていかなければならないでしょう。